

ウィリアム・バードの楽譜出版

—声楽曲集『詩編、ソネット、悲しみと敬虔の歌曲集』と『くさぐさの歌』に焦点をあてて—

能登原由美

ウィリアム・バードは、作曲家として数多くの優れた作品を残したばかりではなく、国王から与えられた楽譜の印刷と出版に関する独占的権利によって、楽譜出版活動がようやく浸透し始めた 16 世紀終わりのイングランドの楽譜出版活動に大きな影響力を持った。本稿は、バードの 2 冊の曲集、『詩編、ソネット、悲しみと敬虔の歌曲集 *Psalmes, Sonets, and Songs of Sadnes and Pietie*』(1588、以下『詩編』と略)と『くさぐさの歌 *Songs of Sundrie Natures*』(1589、以下『歌』と略)の出版を通して、バードの楽譜出版活動に対する姿勢を明らかにし、バードが当時のイングランドの楽譜出版活動において果たした役割を論じたものである。

考察の方法として、2 冊の曲集のタイトル・ページや序文の内容から、バードの編纂の意図を探った。その結果、これらの曲集には 2 点の共通する特徴があることが明らかとなった。それは、バードが 1) 曲集の多様性を強調し、2) 音楽愛好家を意識していたことである。ここから、バードが 2 冊の出版にあたって、音楽愛好家を対象とする幅広い楽譜受容者の獲得を狙っていたことが窺える。実は、このようなバードの狙いが、楽譜出版活動がリスクの大きな事業であった当時のイングランドにおいて、初めて出版を成功させることのできた大きな要因であった。イングランドでは、これらの曲集が出版される 1580 年代末に至るまで楽譜出版活動は低迷していたが、経済の発展と共に楽譜を受容できる潜在的な層は拡大していた。一方、音楽愛好家の間ではイタリア音楽の流行が見られた。2 冊の曲集には、このような新しい楽譜受容者や音楽愛好家の嗜好が反映されていたのである。このように、『詩編』と『歌』の出版には、楽譜受容の場を捉えた巧みな編纂によって、幅広い楽譜受容者を獲得しようとしたバードの積極的な出版姿勢を見ることができる。